



# 永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 ⑬

秘書広報課  
☎24-8801

昭和20年7月の初め、空襲警報で目を覚まし、急いで土器川の土手に上って東を見れば、我が家の東にある青ノ山の南のふもとが燃えているように見えた。それから数日後、同じ警報で起きてみると今度は、青ノ山の北のふもとが燃えているように見えた。それが高松と岡山が空襲で焼けた炎だった。

8月になって間もなく、広島に新型爆弾が落とされたが、これは熱や光が強いので、白い物を頭からかぶっておれば助かると言われる

ていた。それが原子爆弾だったと後でわかった。

話は少しさかのぼるが、土器国民学校の生徒だった私たちは、勉強はそっちのけで、運動場を掘り返してサツマイモを植えた。味は良くないが、

たくさん収穫できる

「護国」という種類の

## 土器国民学校での思い出

土器町 西池 一美さん

イモだった。みんなで懸命に植えたサツマイモだったが、台風で土器川が大水になり、運動場が水浸し、水が引いた後急いで掘り出したが半分以上はだめだった。また、それぞれの集落ごとに、空き地の開墾を学校から言い渡され、私たち上分地区の子どもたちは、土器川の土手の下の砂地を見つけて、そこを掘り返し畑にした。肥料には馬糞を集めることにした。稲ワラで織った直径80cm、深さ40cmぐらいの「ぶご」と呼ばれる袋を2

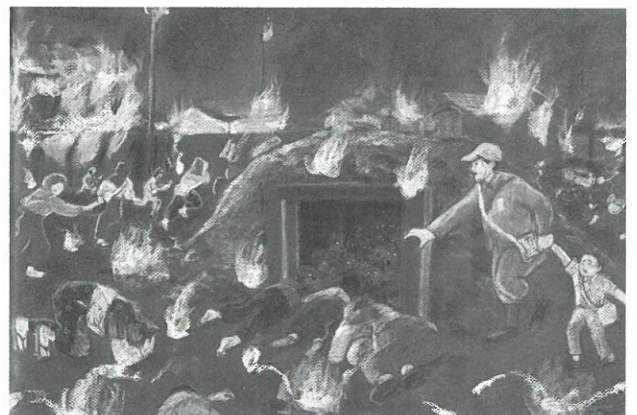
人で担いで拾い集めた。現在のよくな車社会ではないので、大八車と呼ばれる馬車や、兵隊さんが乗った馬などがよく通るので、いたるところに馬糞が落ちており、「ぶご」に半分くらいはすぐに集めることができた。それを畑に撒き、耕して野菜の種を蒔いて世話をした。それから土器川の土手に生えている「チガヤ」や「チョマ」を刈り取りしていた。チガヤは乾燥して、チョマは皮をむいて学校で集めて供出した。また、たんぼの

あぜ道に生えている彼岸花の球根を掘って集めて供出した

た。現在のようにあぜはコンクリート化していない時代なので、あぜを掘り返して農家の人に叱られながらの仕事だった。

後になってわかったことだが、チガヤは兵隊さんが使う「ミノガサ」になり、チョマは繊維を取って軍服を作る材料に。彼岸花の球根はアメリカ本土を直接攻撃する風船爆弾を作るための糊の材料だったそうだ。

今でも目の底に残っている風景は、鉄砲も持たず、ミノガサを着



「戦争という言葉は2度と聞きたくない」

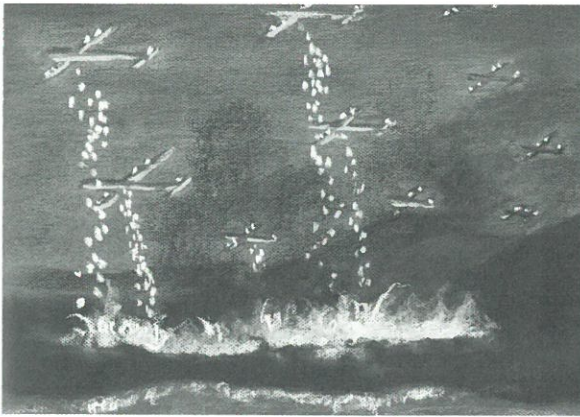
てとほとほと雨の中を進んで行く兵隊さんの列だった。戦時中、学校は男女別々だったが、戦争が終わって男女共学になった。それまでは、小学校高等科1年、2年が一緒になり、男女別の教室を使っていたが、学年別男女共学となり、教室内が急に華やいだことを思い出す。

あれから数十年が過ぎたが、今でも忘れることができない、ある意味で、懐かしい思い出でもある。

### 用語の説明

供出 国民や民間の物資を、政府に提供すること。戦時下では、金属、毛皮、宝石なども提供した。

絵：高松空襲を子どもたちに伝える会  
発行「えほん高松空襲」より



逃げる漁船から見た高松空襲